

第3章

小学校における キャリア教育



第1節 小学校におけるキャリア発達

(1)各学年団におけるキャリア発達の捉え方

次の表は、平成18年11月に文部科学省から出された「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引 一児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために一」，及び，平成21年3月に国立教育政策研究所から出された「自分に気付き，未来を築くキャリア教育 一小学校におけるキャリア教育推進のために一」を基に，それらの文言を整え，再整理して，小学校段階におけるキャリア発達の特徴と育成することが期待される能力の例をまとめたものである。

【基礎的・汎用的能力の表】

	低学年	中学年	高学年
キャリア発達の主たる課題	学校生活への適応	友達づくり，集団の結束力づくり	集団の中での役割の自覚，中学校生活に向けた心の準備
キャリア発達に即した主たるねらいの例	自分の好きなこと，得意なこと，できることを増やし，様々な活動への興味・関心を高めながら意欲と自信をもって活動できるようにする。	友達のよさを認め，協力して活動する中で，自分のもち味や役割を自覚することができるようにする。	苦手なことや初めて経験することに失敗を恐れず取り組み，そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようにする。
人間関係形成・社会形成能力の例	<ul style="list-style-type: none"> あいさつや返事をする。 友達と仲よく遊び，助け合う。 家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分と友達のよいところを認め，励まし合う。 互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 異年齢集団の活動に進んで参加し，役割と責任を果たす。 社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。
自己理解・自己管理能力の例	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなもの，大切なものをもつ。 決められた時間や，生活のきまりを守る。 自分のことは自分で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよいところを見付ける。 自分のやりたいこと，よいと思うことなどを考え，進んで取り組む。 自分の仕事に対して責任を感じ，最後までやり通そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の長所や短所に気付き，自分らしさを発揮する。 自分の仕事に対して責任をもつ。
課題対応能力の例	<ul style="list-style-type: none"> 作業の準備や片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画づくりの必要性に気付き，作業の手順が分かる。 学校生活をよりよくするために話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分に必要な情報を探す。 見つけた課題を自分の力で解決しようとする。 学級活動をよりよいものにするために解決方法を話し合う。
キャリアプランニング能力の例	<ul style="list-style-type: none"> 係や当番の活動に取り組み，それらの大切さが分かる。 身近で働く人々の様子が分かり，興味・関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 係活動や当番活動に積極的に関わり，働くことの楽しさが分かる。 いろいろな職業や生き方が分かる。 日常生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。 将来の夢や希望をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 施設・職場見学等を通し，働くことの大切さや苦勞が分かる。 身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 学んだり体験したことと，生活や職業との関連を考える。

無論、キャリア教育では、学校や教師の裁量に基づく多様な創意工夫を前提とした、目の前の児童の現状を踏まえた具体的な目標の設定や指導が特に重要であり、特定の目標や方法に画一化されるべきではない。各学校においては、前ページの表を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて育成すべき具体的な能力を設定し、工夫された教育を通じて達成することが望まれる。

また、学習指導要領においては、小学校、中学校、高等学校を通してキャリア教育に計画的、系統的に取り組んでいくことを明確にするため、学級活動「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」が設けられている。学級活動(3)の指導において、学校での教育活動全体や、家庭、地域での生活や様々な活動を含め、学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につながったり、将来の生き方を考えたりする活動を行う上でも、低学年・中学年・高学年それぞれの発達の段階に即した指導が求められる。その際には、例えば、次のような発達の段階に即した指導のめやすの例を参考に、児童の実態を踏まえた適切な指導を行うことが大切である。

発達の段階に即した学級活動「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」の指導のめやすの例

〈低学年の指導〉

- この一年でどのようになりたいかを考え、目指す姿について話し合い、出された意見を参考に自分の目標を決め、希望や目標をもって生活できるようにすることを重視して指導する。できたという実感を味わい、自信につながる活動にする。
- 学級生活の中で、自分がやってみたい仕事を見付け、一定期間、継続して行ったり、当番の仕事の仕方を覚えたり、友達と一緒に仕事に取り組んだりできるように指導する。
- 学ぶことのよさや大切さについて考え、進んで学習に取り組めるように指導する。
- 幼児期の教育との連携を一層重視するとともに、家庭との連携を密にしながら、意図的、計画的に活動を工夫し、生活の中で繰り返し指導していく。

〈中学年の指導〉

- 教師の思いや保護者の願いを知り、自分が目指す姿について話し合い、具体的な解決方法や目標を設定し、目標に向かって取り組めるようにすることを重視して指導する。振り返りによって自分自身の成長を感じ、更に取り組んでみようとする態度を育てられるような活動にする。
- 日直や当番活動、係活動など、自分の役割を果たすことの意味や大切さについて考え、友達と協力して最後までやり遂げられるように指導する。
- 今の学びが将来につながることを知り、学ぶことの意味、学習の見通しや振り返りの大切さ、学校図書館等の効果的な活用の仕方について考え、主体的に学習に取り組めるように指導する。

〈高学年の指導〉

- 自分や周りの人の学校生活への希望や願いを基に、話し合いを通して目標を立て、意思決定したことについて粘り強く取り組めるようにする。努力をしてやり遂げた達成感が味わえるような活動にすることを重視して指導する。
- 当番や委員会など、自分や周りの人のために働くことの大切さについて話し合い、自分の役割や責任、自他のよさを考え、友達と高め合って取り組めるように指導する。
- 自分の将来を描き、その実現のために学習することの意義や、学習の見通しや振り返りの大切さ、適切な情報の収集や活用の仕方について考え、主体的に学習に取り組めるように指導する。

出典：文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編』

(2)各学校におけるキャリア発達の課題の具体的な捉え方

キャリア教育は、一人一人のキャリアが多様な側面をもちながら段階を追って発達していくことを深く認識しつつ取組を展開するところに特質がある。また、キャリアは、発達の段階やその発達課題の達成と深く関わりながら、段階を追って発達していくものである。よって、一人一人のキャリア発達を促進させるためには、まず、各学校において目の前の児童の現状を踏まえ、必要とされる能力を意図的に育成していくことが求められる。その上で、各学年団の前後の関係を理解することや、中学校の時期におけるキャリア発達との関連を捉えることなど、時系列的な関連性を理解し、継続的・系統的な指導を行うことができるようにすることが大切である。

各学校において、キャリア発達の課題を明確にし、キャリア教育を通して身に付けさせたい能力を設定するためには、児童の現状を把握する必要がある。その際には、現状を数値化して把握する「定量的な把握」と、数値的な計測結果には現れにくい質的な側面について把握する「定性的な把握」の双方が不可欠である。

〈定量的な把握〉

2件法・3件法・多肢選択法・評定法などの手法を用いたアンケートによる定量的な把握は、個々の児童の状態だけでなく全体的な傾向を把握するのに適している。例えば、児童自身が自己の将来についてどのように考え、現在どのような力を身に付けていると考えているのか、まだ経験していなかったとしてもどのようなことだったら「できそうだ」と思えるのかなどを把握することができる。

〈定性的な把握〉

面談、日常的な対話や観察、アンケートの自由記述欄の読み取りなどを通して、定量的な把握によって得られた数値データの背景を解釈したり、数値には現れない変容を把握したりすることができる。例えば、社会的な体験などを通して視野が広がると、自分ができることや「できそうだ」と思えることなど、自己肯定感・自己効力感などに関する数値データが一時的に後退することがある。このような場合には、定性的な把握を適切に行い、そのような数値上の変化の背景を読み解くことが重要である。数値データの停滞や後退が、必ずしも児童の成長や発達自体の停滞や後退を意味するとは限らない。

なお定量的な把握を行う際には、それに先だって、これまでそれぞれの学校で実施されてきた各種のアンケートや意識調査などの項目を再度点検することが重要である。例えば、年度ごとに実施している保護者アンケートや学校評価(自己評価・学校関係者評価)などに、キャリア教育や児童の社会的・職業的自立に関わる項目が含まれている場合には、新たなアンケート調査を実施する前に、それらの分析結果を数年分遡って再分析することも考えられる。

また、国立教育政策研究所が実施している「全国学力・学習状況調査」の児童質問紙を見ると、例えば平成31年度の場合、「自分には、よいところがあると思う」「将来の夢や目標をもっている」「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」「学級みんなで話し合っただけで決めたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがある」「学校のきまりを守っている」「人が困っているときは、進んで助けている」「人の役に立つ人間になりたいと思う」「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」「国語(算数)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」など、基礎的・汎用的能力に深く関わる質問項目を見いだすことができる。これらの質問項目によって得られた結果を、

全国や県の平均と比較することによって、自校の児童の現状(強みや弱み)を把握することに役立てることが可能である。

第2節 教育課程との関わりにおけるキャリア教育

(1) 児童の現状を踏まえた具体の能力の設定の取組

キャリア教育の実践に当たっては、一人一人の児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるようにすることが求められる。その際、身に付けさせたい資質・能力の中核となるのは、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の四つの能力によって構成される基礎的・汎用的能力である。

本書第1章第5節において解説されているとおり、これら四つの能力は、相互に関連・依存した関係にあり、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを前提に構想されたものではない。これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるかは、学校や地域の特色や児童の発達の段階によって異なると考えられ、各学校においては、この四つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体の能力を設定し、工夫された教育を通じて達成することが望まれる。

それゆえ、前節で整理したとおり、各学校においては「定量的な把握」と「定性的な把握」の双方を通して自校の児童たちの現状を捉え、それを基盤としつつ、それぞれの学校教育目標や教師や保護者の願いを視野に収めながら、「目の前のこの子たち」にふさわしい具体の能力、すなわち、キャリア教育を通して身に付けさせたい力を設定する必要がある。

その際特に重要となるのは、各学校において身に付けさせたい力が、卒業時の到達目標として「○○することができる」「○○する」など、実際の行動として現れるという観点に立って表現されていることである。このような目標設定がなされることにより、卒業までに児童が身に付ける能力の全体像を描くことが可能となり、また、「できるようになったかどうか」というアウトカム評価をすることも可能となる。従来、キャリア教育の目標を設定する際には、「望ましい職業観・勤労観を育成する」「たくましく生きる力を高める」など、多様な解釈の余地を残す抽象度の高い表現が用いられることも少なくなかった。そのため、キャリア教育の取組を通して目標がどれほど達成できたかという検証も自ずと困難とならざるを得ず、検証を通して明らかになった課題等をフィードバックし、新たな取組に反映させる検証改善サイクル(PDCAサイクル)を確立することも難しかったと言えよう。



キャリア教育は、各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし、日々の教育活動全体を通して達成させることを目指すものである。各学校がこの視点に立って教育の在り方を幅広く見直すことにより、教職員にそれぞれの学校の教育の理念と進むべき方向が共有されるとともに、教育課程の改善が促進される。そして、その基盤となるのが、先述した目の前の児童の現状を踏まえた具体的な能力の設定である。

以下、児童の現状を把握し、それを踏まえてキャリア教育の目標を設定しながら実践に取り組んでいる事例を見てみよう。

PDCAサイクル

PDCAを初めて提唱したのは、アメリカの統計学者であり、企業経営コンサルタントとしても知られるデミング(William E. Deming, 1900-1993)であると言われています。彼は経営の基本として「Plan-Do-Check-Act」の4要素を示し、アメリカを中心に広く受け入れられました。

日本ではPDCAの「A」を「Action」と記すことも多く見られます。



【事例1】福島県東白川郡棚倉町立棚倉小学校

【校区について】

福島県中通りの南部に位置し、学制発布の年1872年(明治5年)に創立した伝統校。全校児童数は404名、学級数は通常学級16、特別支援学級2、通級指導学級1である。キャリア教育の推進は、棚倉町の教育施策の柱であり、幼・小・中の連携を図った取組が行われている。

(1)「目の前のこの子たち」を多面的・多角的に理解する

キャリア教育の目標を設定するために、「目の前のこの子たち」を理解することを大切にしている。各種アンケートから、基礎的・汎用的能力に関する質問項目を見だし、児童のよさと課題を把握する。特に、児童のよさは、課題を解決するためのリソースとなるものなので、丁寧に把握している。例えば、アンケート項目から、児童のよさとして、「将来の夢や目標をもっている」こと、課題として、「計画的に学習する」ことを把握したとする。この場合、「計画的に学習する」力を育てるために、よさである「将来の夢や目標をもっていること」を生かした実践を取り入れることが効果的であることが見えてくる。あわせて、日常の対話やスケジュールプランナー(毎日の予定や家庭学習の計画、一日の振り返り等を記入するシート)、「キャリア・パスポート」等から、児童のがんばりや困り感を見取り、どのような力を身に付けさせたいかを見いだしていく。

(2)学年ごとに育てたい力を設定する

(1)で述べた現状の把握、児童理解と併せて自校のキャリア教育の年間指導計画を基に、育てたい力を設定していく。本校では、一年間を四つに分けて、育てたい力を学年ごとに教師が設定している。一年間を四つに分けて四半期ごとに育てたい力を重点化して設定すると、年間を通して四つの能力を意識して育てていくことになる。ここで大切なことは、児童が自己や学級の成長に必要な力だと捉えている力を設定することである。児童理解が重要である理由はここにもある。また、四半期の期間だけで、設定した力が十分に身に付くということではなく、年間を通して意図的・計画的に重点化して育てるこ

とが、効果的であると考えている。さらに、設定した力は、全教職員で共有するとともに、その力が高まった児童の姿を見取り、認め称賛していく。そうすることで、重点化した力を価値付け、強化していくことを目指している。

【第5学年が設定した力】

時期	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
重点化する 基礎的・汎用的能力	自己理解・ 自己管理能力	人間関係形成・ 社会形成能力	課題対応能力	キャリア プランニング能力
具体的能力	他者との関わりを通して、自己を見つめ、個性の伸長を図ることができるようにする。	自分の考えや気持ちを他者に分かりやすく伝えることができるようにする。	分からないことやもっと知りたいことは、自分で調べたり他者に聞いたりして解決することができるようにする。	人の役に立つために、何事にも進んで取り組むことができるようにする。
学年テーマ	みんなちがって みんないい	自分からキャッチボールはじめてみない！	新たな道（未知）を 切り拓こう!!	今ある力を 誰かのために 次の自分のために

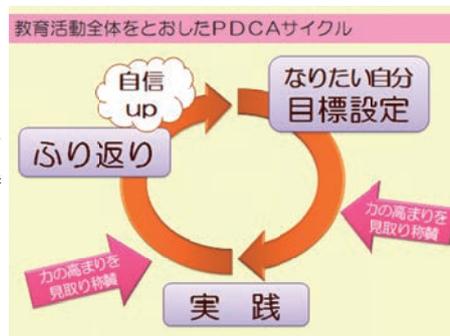
上の表は、第5学年が四半期ごとに重点化して設定した力をまとめたものである。教師が設定した育てたい具体的能力を児童に分かりやすい言葉にしたものが、「学年テーマ」である。この実践を令和元年度からスタートさせて2年が経過した頃、「学年テーマ」を児童とともに創り上げる姿が見られるようになった。

【四半期ごとに設定した力の高まりの可視化】



(3) 設定した力を基にして児童が目標を立てる

(2)で設定した力を基に、児童がなりたい自分をイメージして目標を立てている。各教科等、学校行事、日常生活等、全ての教育活動において、その目標の達成に向けて、自力または協働で努力する過程で、全ての教職員で力の高まりを見取り称賛している。見取った姿は、キャリア教育の要である特別活動の学級活動(3)において振り返り、達成感や自己有用感を味わうことができるよう工夫し、新たな目標をもつことにつなげている。



PDCAサイクルが軌道に乗り始めてから、児童の自己マネジメント力が向上しつつあり、授業や家庭学習においてもPDCAサイクルを意識して、計画を立てて取り組めるようになってきた。全ての教育活動において、目標を達成するためにPDCAサイクルを意識して取り組むことが、自ら学ぶ力を高

めることにつながっている。

下のシートは、毎日の予定や家庭学習の計画、一日の振り返りを記入するスケジュールプランナーと呼ばれているものである。高学年児童は、このシートを使って、PDCAサイクルを意識しながら、家庭学習に取り組んでいる。

【スケジュールプランナー】

(2)カリキュラム・マネジメントの視点によるキャリア教育

小学校学習指導要領は、総則において、「児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努める」と定めている。

カリキュラム・マネジメントの視点によるキャリア教育の在り方については、本書第2章に詳述されているが、ここでは、小学校の児童の発達段階や小学校教育において留意すべき点などをより強く意識しながら、そのポイントを整理していく。

① 何ができるようになるか — 具体的能力設定のポイント —

本節(1)で解説したとおり、各学校においては「定量的な把握」と「定性的な把握」の双方を通して自校の児童の現状を捉え、それを踏まえつつ、「目の前のこの子たち」にふさわしい具体的能力、すなわち、キャリア教育を通して身に付けさせたい力を設定する必要がある。それによって、「できるようになったかどうか」というアウトカム評価をすることも可能となり、キャリア教育の検証改善サイクル(PDCAサイクル)も確立される。

ここで、キャリア教育を通して身に付けさせたい力の設定は、それぞれの学校において、少なくとも以下の3つの役割を担うことに気付く必要があるだろう。

〈児童にとって〉

各学校が設定したキャリア教育を通して身に付けさせたい力は、児童にとって、キャリア教育のめあてであり目標である。一人一人の児童が、卒業まで(あるいは、学年末まで)の見通しをもち、「なりたい自分」を明確にし、その実現に向かって努力することができるよう、身に付けさせたい力の設定に当たっては児童と共有できる内容と表現で示される必要がある。

とりわけ、低学年の身に付けさせたい力の設定に当たっては、思い切って焦点化して、その数を少なく抑え、入学直後の児童にも容易に理解できるものとするのが大切である。

〈教職員にとって〉

キャリア教育を通して身に付けさせたい力は、「○○することができる」などの表現で示され、それはそのまま、「できるようになったかどうか」というアウトカム評価をする上での観点(規準)の基盤となる。また、このような具体的な目標を設定し、それらを心にとめておくことによって、児童がその目標を達成したときに、それまでの努力や成果自体を適切に捉え、チャンス逃すことなく褒めることができるようになる。具体の能力の設定は、児童の成長を認め、更なる伸展を促すための、いわば「褒めポイント」の設定にもなると言える。

〈保護者や地域の方々にとって〉

このような具体的な目標は、保護者や地域の方々とは共有することによって、家庭や地域での児童の望ましい行動の価値を積極的に認めるための「褒めポイント」ともなる。特に、思春期を迎え保護者との関係が不安定になりやすい高学年においては、保護者が児童を褒める機会を見だしにくくなりがちである。そのような場合において、学校と共有する具体的な「褒めポイント」は、保護者と児童との関係性の改善にも寄与し得るだろう。また、キャリア教育を通して身に付けさせたい力の共有は、家庭や地域社会と協力して教育活動の更なる充実を図っていくことを目指す「社会に開かれた教育課程」の実現にも貢献するものである。

② 何を学ぶか — 教育活動全体を通じた指導の在り方と「要」としての学級活動 —

キャリア教育は、小学校・中学校・高等学校等の学校種を問わず、それぞれの学校で行っている教科・科目等の教育活動全体を通して取り組むものであり、単に特定の活動のみを実施すればよいとする理解や、新たな活動を単に追加すればよいとする理解は誤りである。小学校においても、各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動のそれぞれの特質に応じつつ、全ての教育活動を通じた実践が不可欠である。

その際、「各教科等の単元や題材等の中に存在しながら、キャリア教育としての価値が十分認識されず、相互の関連性や系統性も確保されてこなかった教育活動」、すなわち、キャリア教育の「断片」を意識

化して取り組むことが重要となる。まずは、キャリア教育の断片を洗い出してみよう。

また、各教科等を通じたキャリア教育の実践に当たっては、本書第1章第6節においても指摘されているとおり、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善とキャリア教育との密接な関連を意識する必要がある。とりわけ、学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会答申が、「主体的な学び」の視点にたった授業改善について次のように指摘している点は重要である。

1. 洗い出す
キャリア教育の「断片」の意識化を

キャリア教育はそれぞれの学校の教育活動全体を通して実践することが大切です。まずは、学校の教育活動の中にあるキャリア教育の「断片」を見い出しましょう。

- **指導内容に関すること**
 例) 各教科の中で扱われる単元や題材などの内容が、生活や社会、職業や仕事に関連する場合、それらも一人一人の児童生徒の将来に直接かわかるとして理解させる。
- **指導手法に関すること**
 例) 話し合い活動やグループ活動の活用など、指導方法の工夫・改善を通して、社会生活・職業生活にも応用できる能力を高める。
- **生活や学習の習慣・ルールに関すること**
 例) 学習規律の徹底、時間の遵守、片付けの仕方などに關する指導を通して、自らを律する力や様々な課題に対応する力を高める。
- **これまで行ってきた体験的なキャリア教育を見直す**
 社会人講話や職場見学、職場体験活動、インターンシップといった体験的なキャリア教育については、「目指す姿、付けさせたい力」を念頭にに入れて、その果たすべき役割を明確にし、「事前・事後指導を含めて体系的・系統的に取り組まよう」。

出典：国立教育政策研究所（2012）「キャリア教育をデザインする—今ある教育活動を生かしたキャリア教育—」

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

第3章 小学校におけるキャリア教育

一人一人の児童が主体的な学びを実現するためには、それぞれが「自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組むこと」が前提となっている。

また、「深い学び」の実現のためには、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることが不可欠であるが、この「見方・考え方」について同答申は次のように述べている。

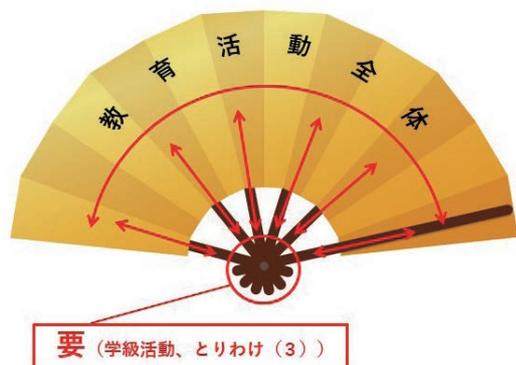
「見方・考え方」には教科等ごとの特質があり、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして、教科等の教育と社会をつなぐものである。子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かされるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる。

さらに、同答申は、上の引用部分に示された「教科等を学ぶ本質的な意義」について、次のように指摘していることも見落とされるべきではないだろう。

子供たちに必要な資質・能力を育てていくためには、各教科等での学びが、一人一人のキャリア形成やよりよい社会づくりにどのようにつながっているのかを見据えながら、各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要になる。

このように、各教科等において主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う上では、キャリア教育との関連を図ることが特に重要である。

以上の整理が示すとおり、教育活動全体を通したキャリア教育の重要性は自明である一方、これまで、その意図が十分に理解されなかったことによって指導場面が曖昧にされてしまい、また、狭義の「進路指導」との混同により、特に特別活動において進路に関連する内容が存在しない小学校においては、キャリア教育が体系的に行われてこなかったという課題が指摘されてきた。さらに、将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、「働くこと」の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかと、といった指摘もある。



こうした指摘等を踏まえ、学習指導要領(平成29年告示)では、特別活動の学級活動が学校教育全体を通して行うキャリア教育の「要」となることが示された。要としての役割を担うこととは、キャリア教育が学校教育全体を通して行うものであるという前提の基、これからの学びや自己の生き方を見通し、これまでの活動を振り返るなど、教育活動全体の取組を自己の将来や社会づくりにつなげていくための役割を果たすということである。

その際、キャリア教育の視点からの小・中・高等学校のつながりが明確になるように、小学校の学級活動にも「(3)一人一人のキャリア形成と自己実現」が新設されたことは注目に値する。この学級活動(3)における「ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成」「イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解」「ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用」は、小学校におけるキャリア教

育の要としての役割を中核的に担う活動と言えよう。

学級活動(3)においては、学校での教育活動全体や、家庭、地域での生活や様々な活動を含め、学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うことが必須となる。

こうした活動を行うに当たっては、教師の適切な指導の下、各教科等の学びと特別活動における学びとを往還しつつ、振り返って気付いたことや考えたことなどを児童が記述して蓄積する「キャリア・パスポート」を活用することが重要である。「キャリア・パスポート」によって、小学校、中学校、高等学校の各段階における学習や生活を振り返って蓄積していくことにより、発達の段階に応じた系統的なキャリア教育の一層の充実が期待されている。また、「キャリア・パスポート」を通して、学習や生活の見通しをもち、振り返ることを積み重ねることにより、児童は、年間を通して、あるいは入学してから現在に至るまで、どのように成長してきたかを把握することができる。特に、気付いたことや考えたことを書き留めるだけでなく、それを基に、教師との対話をしたり、児童同士の話し合いを行ったりすることを通して、自分自身のよさ、興味・関心など、多面的・多角的に自己理解を深めることになる。さらに「キャリア・パスポート」は、教師にとって、一人一人の児童の様々な面に気付き、児童理解を深めていくための重要な資料ともなる。

③ どのように学ぶか ―指導計画の作成と指導の充実―

教育活動全体を通して取り組むキャリア教育は、学校の特色や教育目標、児童の実態などを踏まえつつ教育課程に明確に位置付けられ、キャリア教育の全体計画及び年間指導計画として明示される必要がある。その際、小学校においては、「進路の探索・選択に係る基盤形成の時期」としての特性を踏まえてこれらの計画を作成することが重要である。

小学校の時期は、身近な人から集団へと人との関わりを広げながら、皆のために働くことの意義を理解し、自分の役割を主体的に果たそうとする態度を育成する時期である。また、日常の生活や学習に高い目標を立て、希望と目標をもち努力して達成しようとしたり、自分の特徴に気付き、よいところを伸ばそうとしたりする時期でもある。これを踏まえ、小学校においては、学級・学校生活及び社会生活の中での自らの役割、働くことや学ぶことの意義の理解、興味・関心の幅の拡大、自己及び他者への積極的関心の形成等、社会性、自主性・自律性、関心・意欲等を養うことが特に求められる。

この実現のためにも、各教科等の特質を生かした取組を計画し、実践する必要がある。グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎の育成を目指す「社会科」、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力の育成を目指す「生活科」、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を目指す「家庭科」、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通してよりよく生きるための基盤となる道徳性を養う「道徳科」、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す「総合的な学習の時間」、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う「特別活動」はもちろんのこと、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高めることを目指す「国語科」、日常の事象を数理的に捉え見通しをもち筋道を立てて考察する力や、学んだことを生活や学習に活用しようとする態

第3章 小学校におけるキャリア教育

度などを養う「算数科」、自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う「理科」、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成を目指す「音楽科」、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力の育成を目指す「図画工作科」、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指す「体育科」などの特質を生かしつつ、教育活動全体を通じたキャリア教育の指導計画の作成が不可欠となろう。



その際、例えば、児童会活動や当番活動等の学校内での活動や、地域の探検や家族・身近な人の仕事調べ、商店街での職場見学等地域社会と関わる活動など、これまでも多くの小学校でキャリア教育の一環として取り組まれてきた体験的な学習活動を今後も継続させていくと同時に、「目の前のこの子たち」の現状を踏まえて設定した身に付けさせたい力の育成にふさわしいキャリア教育の「断片」を、各教科等の単元や題材などから洗い出し、年間指導計画に位置付

けていくことが大切である。

無論、効果的な教育活動を進めていくためには、キャリア教育の一環として意図をもって洗い出された「断片」をつなぎ合わせ、体系的・系統的に指導していくことが重要である。学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行う「学級活動(3)」、とりわけ、「キャリア・パスポート」を活用した児童同士の話し合いなどを通して、多面的・多角的に自己理解を深める機会を適切に設け、それらを年間指導計画に位置付けることを忘れてはならないだろう。

令和2年度 第1学年 キャリア教育年間指導計画											
学年のめあて											
正しいと思ったことをすすんで行おうとする 自分に合った目標を決めてやりとげる						自分と相手の考えの違いが分かる行動する 学級のためにすすんで行動する					
学年	6	7	9	10	11	12	1	2	3		
学級経営	○休み時間の遊び ○当番活動 ○係活動 ○日直のスピーチ ○掃りの食のよいところみつづ(自分のよさや頑張りを伝える)										
教科	<div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 生涯「なにかいっしょいっしょくばる」 ○2年生とのイロノート一緒に学習 楽しもう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 生涯「なにかいっしょいっしょくばる」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 生涯「なにかいっしょいっしょくばる」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 生涯「なにかいっしょいっしょくばる」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 生涯「なにかいっしょいっしょくばる」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 生涯「なにかいっしょいっしょくばる」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> </div>										
特別活動	<div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> キャリアパスポート ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> キャリアパスポート ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> キャリアパスポート ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> キャリアパスポート ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> キャリアパスポート ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> キャリアパスポート ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> </div>										
行事	<div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級会 係活動 ○楽しく、仲良くするための工夫して活動しよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級会 係活動 ○楽しく、仲良くするための工夫して活動しよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級会 係活動 ○楽しく、仲良くするための工夫して活動しよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級会 係活動 ○楽しく、仲良くするための工夫して活動しよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級会 係活動 ○楽しく、仲良くするための工夫して活動しよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級会 係活動 ○楽しく、仲良くするための工夫して活動しよう </div> </div>										
特別活動	<div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級活動「よさこそ年毎へ」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級活動「よさこそ年毎へ」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級活動「よさこそ年毎へ」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級活動「よさこそ年毎へ」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級活動「よさこそ年毎へ」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> <div style="width: 33%; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 学級活動「よさこそ年毎へ」 ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう ○自分の得意なことを伝えよう </div> </div>										

年間指導計画の例：東京都世田谷区立尾山台小学校・第1学年(令和2年度)



廊下に掲示された年間指導計画の様子：東京都世田谷区立尾山台小学校・第6学年(平成29年度)

また、年間指導計画は、学校の創意工夫の下、児童の多様で質の高い学びを引き出すため、学校教育を通じて児童が身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容などの全体像を分かりやすく見わたすことができる「学びの地図」でもある。各学年の年間指導計画を教職員全員で共有することはもちろん、児童自身が学びの見通しをもち、振り返ることによって学ぶ意義を自覚する手掛かりを得たり、保護者や地域の関係者等が幅広く活用したりできるような工夫が必要である。

④ 児童一人一人の発達をどのように支援するか 一両輪としてのガイダンスとカウンセリング

小学校学習指導要領の特別活動は、「学校生活への適応や人間関係の形成などについては、主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の児童の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリング(教育相談を含む。)の双方の趣旨を踏まえて指導を行うこと。特に入学当初や各学年のはじめにおいては、個々の児童が学校生活に適応するとともに、希望や目標をもって生活できるよう工夫すること。」と示している。

ガイダンスの機能の充実を図ることは、全ての児童が学校や学級の生活によりよく適応し、豊かな人間関係の中で有意義な生活を築くようにするとともに、選択や決定、主体的な活動に関して適切な指導・援助を与えることによって、現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力を育てる上で、極めて重要な意味をもつものである。学級活動をはじめとする特別活動はもちろん、学校生活への適応や人間関係の形成などに関わる様々な教科等を通した集団の場面での適切な指導や援助が求められる。

また、カウンセリングの機能を充実させることによって、児童一人一人が抱える課題等について、本人又はその保護者などにその望ましい在り方についての助言を通して、児童のもつ悩みや困難の解決を援助し、児童の発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によりよく適応させ、人格の成長への援助を図ることは重要なことである。ここでいう「一人一人が抱える課題」とは、児童本人がそれを認識して困難や悩みを自覚している場合はもちろん、本人が課題自体を意識するには至っていないものも含む。本人が特定の困難や悩み直面していない場合であっても、個別に対応した指導を行うことを通して、視野を広げたり、新たな環境やこれから始まる学習課題などに積極的に臨めるようにしたりすることはカウンセリングの重要な役割である。

小学校でのキャリア・カウンセリングはどのようにしたらよいですか？

キャリア・カウンセリングという言葉から、中学3年時、高校3年時に行われる卒業直後の進路決定の相談を思い浮かべるとしたら、小学校ではほとんど実践する必要はないでしょう。実践に入る前に、キャリア・カウンセリングを正確に理解しておくことが大切です。

学校におけるキャリア・カウンセリングは、発達過程にある一人一人の子どもたちが、個人差や特徴を生かして、学校生活における様々な体験を前向きに受け止め、日々の生活で遭遇する課題や問題を積極的・建設的に解決していくことを通して、問題対処の力や態度を発達させ、自立的に生きていけるように支援することを目指しています。これはキャリア教育の目標と同じです。ただ、キャリア・カウンセリングは「対話」、つまり教師と児童・生徒との直接の言語的なコミュニケーションを手段とすることが特徴です。

小学校でのキャリア・カウンセリングの実践は広義と狭義の両面から考える必要があります。



広義の実践とは、小学校がこれから続く学校生活の基盤として、学校や教師への信頼、そして学ぶことへの喜びを体験する大切な時期であるという認識に立って、教師がそれぞれの子どもを尊重して温かい人間関係を築くことを意味します。子どもたちとの温かき教育的な人間関係を築くためには、教師は一人一人の子どもとのコミュニケーションを図る能力を向上させることが不可欠となります。

狭義の実践とは、子どもたちが新たな環境に移行したり未経験の学習課題に取り組む際には不安も大きく問題を引き起こしやすいことを意識し、単に不安の解消や問題解決だけでなく、新たな環境や課題に勇気を持って取り組めることを目的とした個別の支援のことです。キャリア発達支援のものと言えるでしょう。例えば、小学1年生は初めての学校生活に不慣れなために課題や問題を体験する時期ですし、どの学年でも学年始め・学期始めや学年末・学期末には新学級や新学年への適応で問題を体験する時期です。特に6年生は中学校進学という大きなステップを乗り越える準備のときでもあるので、中学校へ勇気を持って進めることを目指した個別支援は不可欠です。

キャリア教育の一環として実践される個に応じた支援や指導は、「キャリア・カウンセリング」と呼ばれる。これまで日本の学校教育では、キャリア・カウンセリングが、主に中学校や高等学校において進路指導室や放課後の教室などで行われる進路相談(いわゆる「二者面談」や、保護者を含めた「三者面談」等)に限定されるものと誤解される傾向が強かった。しかし、それらの進路相談は、キャリア・カウンセリングの一つの形態にしか過ぎないことを正しく理解する必要がある。キャリア・カウンセリングは、一人一人との対話を通じたキャリア教育を意味するものであり、特に面談の時間を設けなくても、例えば児童との日常的な会話の中でも行うことができる。大切なのは、キャリア・カウンセリング(対話)を活用して、個別の支援を充実させていくという視点をもつことである。

さらに、キャリア・カウンセリングの実践に当たっては、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、キャリア・コンサルタント等の活用や関係機関等との連携などに配慮することも必要である。特に、医療的なケアが必要な怪我や疾病、家庭の経済的な困窮など、教師による支援のみでは解決が難しい問題が要因となって新たな環境に移行したり初めて出会う学習課題に取り組んだりすることに困難が生じている場合には、専門的な知見をもつ人の参画を得つつキャリア・カウンセリングの機会を積極的に設けるべきだろう。

しかしその一方で、教師、とりわけ学級担任が、個別の会話・面談や言葉がけを通して指導や援助を行うキャリア・カウンセリングは極めて重要な役割を担っている。上述のとおり、キャリア・カウンセリングは、教室や校庭や廊下など、日常の教育活動が生起するあらゆる場所で行うことができる。その子にとって、最もふさわしい時に、最もふさわしい場所で、家庭、地域での生活や様々な活動を振り返